



## 桐生天満宮

桐生天満宮の起源は、およそ1800年前の景行天皇の時代までさかのぼり、産業発展の神である天穂日命（あめのほひのみこと）を祀ったとされる磯部明神がルーツとされている。その後、室町時代に京都北野天満宮の菅原道真公の分霊を祀り、学問の神を祭神とする天満宮となった。徳川家の時代には桐生が絹織物の一大生産拠点として「桐生新町」の都市整備が計画されると、天正19年（1591）、当時、梅原天神と称されていた天満宮は、新町建設の宿頭（出発地点）として現在の地に遷座された。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの際には、桐生で織られた徳川軍の軍旗2,410枚を天満宮にて戦勝祈願し勝利をもたらしたことで、桐生は幕府直轄の天領として重宝される。江戸時代に入ると境内で織物市が盛んに開かれ、天満宮は織物産業の隆盛とともに、まちの中心として人と物の交流の場となっていく。

天満宮の社殿は明和8年（1771）に設計され、落成までには20年以上の歳月を費やした。造営は宮大工として名高い町田主膳を大棟梁とし、本殿7面に施された彫刻は、日光東照宮などの彫刻技術の流れを汲む関口文次郎によるもので、精巧で華麗な彫刻が社殿と見事に調和している。建物全体は権現造が採用され、当時の建築装飾技術を結集した神社建築として、平成2年に群馬県指定の重要文化財に指定されている。今日では初詣の昇運合格厄除祈願や、知恵さずけ天神でもある道真公にあやかろうと初宮参り、七五三の時期には多くの参拝者で賑わうほか、境内には宝船神社や財福稲荷などの摂社・末社も祀られている。また、毎月第一土曜日の古民具骨董市は、関東三大骨董市と称されるほど大きな賑わいを見せ、桐生を代表する行事として定着する。

まちづくり・産業発展の基点として神話の時代から桐生と共にその変遷をたどる天満宮は、現代も信仰の対象と交流の場として本町通りの北端から桐生のまちを見守っている。



産業発展の神祀る関東五大天神  
市街地形成の基点としてまちの変遷見守る

●住所／桐生市天神町1-2-1 ●電話／0277-22-3628 ●HP／<http://www.kiryutenjin.jp/>